

自閉症スペクトラム幼児のごっこ遊びに関する一考察
- 1年7ヵ月間のプレイセラピーの分析 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
西村 菜生

本研究では、一般的に、象徴遊びの獲得に困難をきたすとされる自閉症スペクトラム児におけるごっこ遊びについて、3歳頃のごっこ遊びから4・5歳頃のごっこ遊びへの質的变化に焦点を当て、どのような特徴を有して展開されるかを明らかにすることを目的とし、分析を試みた。

具体的には、まず、一人の自閉症スペクトラム幼児の1年7ヵ月間のプレイセラピーで見られた全ての遊びを、遊びのタイプごとに統合し分類した。その結果得られた遊びのカテゴリーは全8種類であった。次に、それらの遊びの出現傾向が時間の経過とともにどのように変化したかを示した。同時に、それらの遊びの中身がどのように変化したかについても質的に検討し、それらの結果に基づき時期区分を試みた。その結果、第1期「見立て遊びの時期」、第2期「テーマに基づく遊び・アニメの再現遊びの時期」、第3期「人形を介するごっこ遊びの時期」、第4期「人形を介するごっこ遊びの時期（双方向的）」の4つの時期が示唆された。

本研究の結果から、以下のことが考察された。

第一に、1年7ヵ月間のセラピーにおいて3つの遊びの質的転換期が認められ、その中で遊びが質的に変化した点である。具体的には、見立て遊びを繰り返し行う第1期の段階から、アニメや実体験を再現する第2期の段階への変化が見られた。また、そのような、再現して遊ぶ遊び方は、経験やアニメのスク립トを忠実に再現する段階から、それらのスク립トを基に、スク립トを切り取ってつなぎ合わせ、スク립トを創造する第3期の段階へと変化した。そして、第3期にはアニメのスク립トを基にセラピストや他児と双方向的な関わりをする遊び方へと変化した。その中でのY児とセラピストとのやりとりの変化からは、3歳頃のごっこ遊びから4・5歳頃のごっこ遊びへの変化の兆しが見られた。

第二に、遊びの質的变化が認められた一方で、Y児が「～ッテイッテ」という言語行為を用いて他者を先導する遊び方においては変化が見られにくい、また、経験およびアニメの再現遊びが他の遊びに比べて出現しやすい傾向にある等の特徴が明らかになった。しかし、そうしたY児が先導して行う再現遊びを土台にして、他の遊びが発展していた。

以上のことから、自閉症スペクトラム児にとって、ごっこ遊びを通じた情動的交流を可能にするためには、その子どもの生活体験を捉え、共有し、そのような共有された事象をごっこ遊びの中で再現することを通じて、遊びを展開することの重要性が示唆された。